

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 心 理 学 ）	氏名	有 馬 道 久
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
児童の非言語的行動を手掛かりとした教師による理解度の読み取りに関する研究			
論文審査担当者			
主 査	教 授	森 敏 昭	
審査委員	教 授	岡 直 樹	
審査委員	教 授	井 上 弥	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文では、授業中の教師と児童のコミュニケーションのうち、児童の非言語的行動を手掛かりとした教師による理解度の読み取り過程を検討している。本論文の第1の目的は、教師の視線行動に基づく理解度の読み取りの実態を明らかにすることである。第2の目的は、授業中の児童の非言語的表出行動および教師が用いる手掛かり行動を分析し、それらの一致度が理解度の読み取りの正確さとどのように関連しているかを明らかにすることである。</p> <p>本論文は7つの章から構成されている。</p> <p>第1章では、授業中の児童の非言語的行動を手掛かりとして教師による理解度の読み取り過程を明らかにすることの意義を論じ、非言語的行動は多義的かつ無自覚的であるがゆえに、手掛かり行動や表出行動の優位性および有効性が明確にされていないという先行研究の問題点を指摘した上で、優位な手掛かり行動を推定するための新たな分析手法を開発することの重要性を論じている。</p> <p>第2章では、言語による指示伝達課題における伝達技能の発達過程の検討を通して、コミュニケーションにおける非言語的行動のフィードバック機能の重要性を論じている。</p> <p>第3章では、授業中の教師の視線行動と反省的思考の内容を分析し(研究1)、(1)熟練教師、初任教师ともに授業中の約70%の時間は児童に視線を向けていること、(2)ゆさぶり発問時に初任教师はもっぱら発表児童を注視し、その他の児童を見るのは発表後であるのに対し、熟練教師は発表児童にはほとんど視線を向けず、その他の児童を注視していること、(3)熟練教師は自発的な振り返りを毎分1回の頻度で行い、初任教师に比べて約5倍多いこと、(4)熟練教師も初任教师も主に“その時点の活動内容”を手掛かりにして“児童の理解度や態度”に関する読み取りを行っているが、熟練教師は“意図的視線”を多く向け、文脈情報も利用しながら、“児童の考えを授業展開に活用する”ための読み取りを行っており、この点は初任教师にはみられない特徴であること、を明らかにしている。</p> <p>第4章では、大学生を聞き手とする1対1の模擬的教授場面を設定し、非言語的行動の客観的頻度と非言語的行動のみを基づいて推定された理解度との関連性を分析することによって、</p>			

通常は無自覚に用いられている優位な非言語的の手掛かり行動の分析が可能であることを明らかにし、この推定法の有効性を実証している(研究2)。

第5章では、教師が授業中に児童のどのような非言語的行動を手掛かりにして理解状態を読み取っているのかを自由記述法によって収集した研究3の結果をふまえ、上記の推定法を適用して一斉授業中に児童の理解度を読み取る際の非言語的の手掛かり行動を分析し(研究4)、その結果、男女の挙手、側方視、手遊び、男子の前方視、女子の体の動きが理解度の読み取りの優位な手掛かりであることを明らかにしている。また、映像と背景の音声の両方を提示する場合と映像だけを提示する場合とでは、非言語的の手掛かりの優位性が異なるかどうかを検討し、男女の挙手と女子の机上視において、映像と音声の両方を提示した条件の方が映像だけを提示した条件より優位性が高いことを明らかにしている。

第6章では、上記の推定法を優位な表出行動の推定に適用し、算数の授業の問題解答場面における児童一人ひとりの理解度に関する担任教師による読み取りについて検討している(研究5)。すなわち、児童の非言語的表出行動と教師の用いる読み取り手掛かり行動の一致度が読み取りの正確さを規定するという Bull (1983) の仮説の検証を行い、18の非言語的行動カテゴリーのうち12カテゴリーにおいて、一致群(当該カテゴリーが表出行動かつ手掛かり行動であり、相関係数の正負の方向も一致している児童)が他の3群よりも読み取りが正確であるという、Bull 仮説を支持する結果を得ている。また、解答場面の時間的文脈によって優位な行動カテゴリーが異なることや一致数が多いほど読み取りが正確になることも明らかにしている。

第7章では、研究1～研究5の研究成果を総括し、教師は児童の反応をただ受動的に読み取っているのではなく、必要なタイミングで意図的にその児童に視線を向け、読み取りを行っていることが明確になるように、従来のコミュニケーション過程のモデルの一部修正を提案している。加えて教育実践への示唆として、これらの研究成果を教師の授業リフレクションに活用することを提案している。さらに、読み取りに及ぼす教師の個人特性の影響、授業の流れに沿った児童の非言語的行動の読み取り過程の詳細な検討を行っている。

本論文は、次の3点において高く評価することができる。すなわち、(1)授業中の教師の視線行動と反省的思考の関連性を明らかにし、児童の非言語的行動を手掛かりとして理解度を読み取ることの意義を明確に示したこと、(2)相関係数を用いて優位な読み取り手掛かりとされている非言語的行動を推定するという新たな研究手法を開発したこと、(3)その新たな研究手法を用いて、授業中の教師による理解度の読み取り過程を明らかにしたこと、の3点である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(心理学)の学位を授与されるに十分な資格があるものと認められる。

平成27年1月23日